

四帝仁宗認母故事考

——「抱粧盒」と「仁宗認母傳」——

一

『水滸傳』は、宋江ら一百八好漢を主人公とする物語で、おおむね宋の第八代皇帝徽宗の御世に時代をとる。しかし、その物語は、第四代皇帝仁宗の御世におきた一事件——嘉祐三年（一〇五八）のこと、都に猖獗をきわめる悪疫をはらうため、江西龍虎山の張天師を招きに派遣された洪太尉が、伏魔殿に封じこめられていた一百八魔王をあやまって逃がす——に端を發している。

こうして仁宗の時代に『水滸傳』の物語は始まるが、この第一回に先立つ「引首」では、宋の太祖が天下を統一するにいたる兵亂興亡を概観し、仁宗にいたる皇位の繼承を傳えること、仁宗が天上界の赤脚大仙の轉生であったと物語る。ここ

堀 誠

に、仁宗の英明とその天下の太平が贊美され、政治を補佐する文武の名臣、包拯と文彦博の名も擧げられるが、そもそも赤脚大仙の轉生とする故事は、通俗文學の世界にあつては『平妖傳』四十回本第十四回や『女仙外史』第一回にも設定されるものであつた。その故事については、前稿でその源流を中心⁽¹⁾に論究したが、仁宗をめぐつては、即位後に生みの母を知り、母子相會するという内容の小説戯曲も存在する。それらは多様多彩な世界を呈しているものの、そこには二つの系譜があると思われる。本稿では、その二つの作品、『元曲選』所收の雜劇「金水橋陳琳抱粧盒」（「抱粧盒」と略す）と『明成化說唱詞話叢刊』所收の說唱詞話本「新刊全相說唱足本仁宗認母傳」（「仁宗認母傳」と略す）を取り上げ、その源流をさぐることも小説戯曲化の様相を捉えてみたい。

二

はじめに「抱粧盒」と「仁宗認母傳」について概観する。

「抱粧盒」は、明の臧晉叔の編になる『元曲選』に收載された雜劇作品で、題目・正名を「李美人御園拾彈丸、金水橋陳琳抱粧盒」といい、四折と二つの楔子から成る。まずその梗概を紹介すると、第一回に先立つ楔子で、

「いまだ太子に恵まれない眞宗皇帝、乾象に太子誕生の兆ありとの太史官の奏上をうけて、三月十五日、御園で東南に金彈丸を打ち放ち、それを拾い得た妃嬪を寵幸する。」

という次第を、殿頭官が穿宮内使の陳琳に命じて六宮に傳えさせ、第一折はその當日の場面となる。

「御園にお出ましの眞宗皇帝、いよいよ八角亭から金彈丸を打ち放てば、御園の東端に立っている李美人の方へと飛んでゆく。李美人、金彈丸を拾ったことを陳琳に知らせれば、陳琳は奏上におよび、その晚西宮に遊幸なさる御旨が下る。が、ひとり陳琳は、劉皇后に知れたらと懸念する。」

これをうけて第二折では、月満ちて李美人の出産した皇子をめぐって、一大事件がもちあがる。

「劉皇后は、李美人が皇子を生んだと知るや、皇帝陛下みず

からご覽になると詐り、皇子を殺害して金水橋に放りこむより寇承御に命じる。果して寇承御は皇子を連れ出したもの、紅光紫霧が皇子にたちこめているのを見て、皇嗣が絶えてはと憂えて手を下せない。そこへ陳琳が、御旨により南清宮八大王の長壽祝いに届ける果品を採りに現れたので、寇承御はありのままを打ち開け、皇子の命を救おうとする。陳琳は劉皇后を恐れて承知しないが、とうとう粧盒に皇子を入れられてしまい、八大王のもとに送り届けることになる。そこへ劉皇后が通りかかり、粧盒の中味を怪しみ陳琳を詰問するが、眞宗のお出ましとの知らせに辛くも事無きを得る。」

次いで第三折の前に、

「陳琳は粧盒を手八大王のもとに急行し、ことの顛末を打ち開ける。八大王は一度斷わるが、陳琳の哀願に、皇子を養育し十年後に眞宗のお目にかけることを約す。」

という情節の楔子をはさんで、第三折では十年後に舞臺を轉じる。

「無事成長した皇子を伴い朝見におよんだ八大王、事實を知らせようとするが、劉皇后に阻まれる。劉皇后は八大王の連れてきた子の顔立ちが李美人にそっくりなので、寇承御を呼んで尋問し、さらには陳琳に命じてむち打たせる。が、寇承

御は白状せず、階に頭を打ちつけて命を絶つ。また陳琳は、眞宗のお召しに難を免れる。」

この事件から十年の歳月が流れ、第四折はいよいよ團圓の舞臺となる。

「眞宗の遺命により皇位を継いだ仁宗、かねて八大王から聞いていたことばに基づき、古參の陳琳に眞相を問いただし、八大王のもとに届けられる顛末や寇承御が殉死するにいたるまでの逐一を知る。かくして仁宗、先帝の徳をばかり劉皇后はおかまいなしとし、母なる李美人を純聖皇后とし、八大王には莊田を賜い、寇承御を忠烈夫人に、陳琳を保定侯に封じた。」

さて、この「抱粧盒」は、明初の朱權の『太和正音譜』卷上「羣英所編雜劇」の「古今無名氏雜劇一百一十本」、同じく明の嘉靖年間（一五二一—一五六六）の人晁瑛の『寶文堂書目』卷中「樂府」にそれぞれ著録され、『曲海總目提要』卷四には、

元の無名氏撰。宋の眞宗・劉後の事を演ずるも、正史と相合はず。史も亦た陳琳・寇承御の名無し。而して其の情節、大いに明の弘治の事に類す。金丸記の中に詳らかに見ゆ。此の劇、前に在りて、金丸は其の情節を借りて

敷演す。大略皆彷彿たり。

とあり、その梗概をも附している。しかしながら「抱粧盒」の作者とその成立については詳らかにならず、『太和正音譜』が古く明の洪武三十一年（一三九八）の成立と見られること⁽⁴⁾から、「抱粧盒」が少なくとも明初のころすでに行われていたことを知り得るにとどまる。また『曲海總目提要』には、「抱粧盒」を敷衍したという「金丸記」に關する指摘もあるが、それについては姑く置くことにする⁽⁵⁾。

ところで、「抱粧盒」の壓卷となるのは、寇承御が皇子を救うべく思いをめぐらし、陳琳が皇子の入った「粧盒を抱^{いだ}」いて危難をのがれる第二折、あるいは寇承御と陳琳が劉皇后の嚴しい尋問をうける第三折であろう。その一連の情節のなかで、劉皇后の李美人に對する嫉妬、そして皇子の命を絶たんと企て、後に寇承御と陳琳を嚴しく尋問する殘忍な姿が見れてくるが、その一方で、李美人の存在感は希薄であり、子を失った母の苦悶さえ描かれず、第四折の團圓の場にも姿を現さない。この作品が、むしろ皇子の殺害を企てた劉皇后と皇子の命を救う寇承御・陳琳を機軸として織りなされていることは、この劇作を探る上で特に注目しておきたい。また、眞相の究明は、第四折で仁宗みずから行なう設定であるが、

次に紹介する「仁宗認母傳」では事情が異なる。

三

「仁宗認母傳」は、一九六七年、上海市嘉定縣の宣氏の墓から出土した明の成化年間（一四六五—一四八七）所刊の説唱詞話本の一種で、一九七三年、他の作品とともに影印出版されるにいたった新出の研究資料である。従来、この種の研究では、明清に流行した『龍圖公案』の一篇「桑林鎮」が取り上げられてきたが、「仁宗認母傳」は少しくそれに先行すると認められる作品である。まず、その梗概を紹介する。

「陳州から東京開封府へ歸る道中、桑林鎮の東嶽廟に宿ることにした包丞相、この機會に不平ある者は訴え出るよう觸れ回らせると、鎮の東の破れ窰に住む老婆が訴え出る。老婆は包丞相の頭のうしろのこぶを手掛かりに、その贖物でないことを確かめると、人拂いを要めて、自分が亳州李節度使の娘で、眞宗に太清宮で見初められて後宮に入ったことに始まり、太平の御世の三月三日に儲君を生んだが、時同じく女兒を生んだ劉妃が六宮大使の郭槐と謀り、その女兒と儲君とをすり換えたため、自分はその驚きのあまり誤って女兒を死なせ、冷宮に幽閉される身となったこと、その後、後園の張園

子が内苑にお出ましの太子にわが身の上を話したので、それを聞きつけた郭槐が張園子一族を絞殺したこと、しかし眞宗の崩御ののち、特赦により宮中を出されたが、頼るべき人なくこの窰に身を置くことになったという顛末を告白する。そこで包丞相、確かに太子を生んだという證據を求めると、老婆は、儲君誕生のみぎり兩手は開かず、無理に開かせると、左手に「山河」、右手に「社稷」の文字があったと答える。驚いて包丞相、老婆すなわち李妃を伴い東京に急行し、參内のおり、一計を案じて天子仁宗の兩手に「山河」「社稷」の四文字があることを確かめると、仁宗に生みの母が桑林鎮で身をやつしていることを奏上し、王丞相の進言で、古參の郭槐に仔細を問うことになる。が、郭槐は劉皇后こそわが君の母と言ひ張るので、西臺御史に命じて拷問する。一方、劉皇后は事實が露顯するのを恐れて、徐監官に命じて西臺御史を買収する。そこへ節句の祝儀をねだりに來た三十六宮四十八院都御史が、振る舞い酒に乗じて、天子をあざむく賊官め、と罵るので、捕えて樹木に吊しあげる。その折から、包丞相のおなりとの聲に、實は吊された都御史こそ包丞相であったことが明らかになり、王御史は斬殺される。この報告をうけて仁宗、大いに怒り、南衙府で包丞相みずからの審問と相成

り、配下の董超・薛霸の妙策で、ひとたび郭槐は自白するが、仁宗の前に出ると苦しまぎれの供述とうそぶく。かくして包丞相、妙計を案じて、郭槐を殺害された張園子の舊宅に連行する。夜になり包丞相が天地に祈れば、狂風がまき起り、閻羅王と判官が現れ、張園子一族殺害の裁判となる。郭槐は恐れをなし、すべてを白状するにおよぶ。その實、閻羅王は仁宗、判官は包丞相にほかならず、かくして仁宗、李后を内宮に迎え入れ、郭槐を鼎鑊の刑に處し、劉后に絞死を賜わるが、李后に撫育の恩をさとされて死一等を免じ、包丞相を四海節制使に封じて團圓落着する。」

さて、この「仁宗認母傳」では、桑林鎮の破れ審に住む老婆が包丞相に訴え出ることを事件の發端とし、包丞相の妙計によって真相が究明され、仁宗の母子相會がかなえられる。このいわゆる包公もの（名判官包拯による裁判もの）の情節は、後の「桑林鎮」に繼承されているものの、すでに紹介した「抱粧盒」とは明らかに異なるものである。その情節の著しい異なりによると、「抱粧盒」と「仁宗認母傳」とは、ひとまず内容的に深く關連するものでないと思われるが、「仁宗認母傳」にもその劇作が存在したらしいのである。

明初の無名氏の撰になる『錄鬼簿續編』には、汪元亨の雜

劇作品として、「班竹記」「桃源洞」とともに「仁宗認母」を著録する。⁹⁾ この「仁宗認母」は、現存こそしないが、劇名自體が仁宗の母子相會を意味し、その四文字が「仁宗認母傳」と共通することから、この説唱詞話本「仁宗認母傳」に類する情節を有していたと推測される。しかも作者の汪元亨については、同書に、

饒州の人、浙江の省掾なり。後に居を常熟に徙す。至正（二三四—一三六七）の間、余と吳門に交はる。『歸田錄』一百篇有り、世に行なはれて人に重んぜらる。

という略傳が附されている。その中の「至正の間」に基づく、「仁宗認母」の成立は、ほぼ元末明初の時期と推定される。それによれば、元末明初の時期に「仁宗認母傳」の情節をもつ劇作が存在し、當時すでに「抱粧盒」の一方で行われていたと見ることができよう。

これまで「仁宗認母」については、「抱粧盒」との関係など皆目不明であったが、明の成化年間所刊の説唱詞話本「仁宗認母傳」の發見によって、その情節も推定でき、また元末明初の時期に、仁宗の母子相會を題材とする雜劇に二種類の作があつたことが明白化してくるのである。

四

元明の小説戯曲の場合、その情節を考察するには本事源流を追究することが不可缺になる。『宋史』の仁宗本紀、および卷二四二の章獻明肅劉皇后傳と李宸妃傳によると、仁宗は大中祥符三年（一〇一〇）四月十四日、李宸妃を母として誕生するが、生後まもなく、皇子のなかつた劉皇后の子として養育されることになり、即位ののちも劉皇后を實母と信じて疑わなかつたという。しかも、仁宗がその真相を知つたのは、劉皇后の没した明道二年（一〇三三）のことで、李宸妃はその前年すでに不歸の人となつていたのである。李宸妃傳はその時の模様を次のように記している。

後、章獻太后（劉皇后）崩ずるに、燕王、仁宗の爲に言ふ、陛下、乃ち李宸妃の生むところにして、妃は死するに非命を以てすと。仁宗、號慟して頓毀し、朝まつととを視ざること累日、哀痛の詔を下して自ら責む。宸妃を尊まじび皇太后と爲し、莊懿と諡す。洪福院に幸して祭告し、梓宮を易へ、親しく哭して之を視るに、妃の玉色生くるが如く、冠服は皇太后の如し。水銀を以て之を養ふ。故に壞たぶれず。仁宗嘆じて曰く、人言は其れ信まじずべきやと。

ここに、哀慟してやまない仁宗の姿がありありとうかがえよう。その苦悶はいかばかりであつたらうか。

先に示した「抱粧盒」や「仁宗認母傳」に見る情節は、そのすべてが純然たる虚構になるのでなく、ここに確認し得るような史的事實を源泉として、胚胎生育したものであろう。しかしそのどちらもが、李宸妃と劉皇后の在世中に仁宗が真相を知ることにして、母子相會團圓型の結末に收束していることは、注目に値いしう。

この史的事實と全く異なる設定を捉えてみると、李宸妃傳には、水銀により李宸妃の遺體が保たれていたという。その水銀は、そもそも丞相呂夷簡の命令により棺槨に注入されたのであつたが、果してその効果あつて、のちに仁宗は栩々たる生母の玉容を目にし得たのであつた。後世、小説戯曲の世界に生前の母子相會の設定が誕生してくるのは、單に結末における團圓の嗜好のみならず、仁宗が李宸妃の生前さながらの姿を目にしたという事實も、その温床となつたのであろうか。ともかく、仁宗の悲劇は母子相會する團圓の情節に變容し、それも「抱粧盒」と「仁宗認母傳」に見る二つの情節に分化していたといわねばならぬだろう。

この二つに分化した情節について考えてみると、「抱粧盒」

における劉皇后が李宸妃の皇子を謀殺しようとする設定、あるいは「仁宗認母傳」に見る劉皇后が自分の女兒と儲君をすり換えたとする設定は、劉皇后が李宸妃の生んだ皇子を己れの子としたという事實に生じた相異にほかならないであろう。しかし、ここで特に注意したいのは、「抱粧盒」には、嫉妬深く残忍無慈悲な劉皇后の像が表面に現れ、また「仁宗認母傳」には、仁宗の生みの母ながら零落した李宸妃の姿を見ることである。このそれぞれに特異な形象は、どのようなところに源流するのであったろうか。

『宋史』により再び検討してみると、章獻明肅劉皇后傳には、劉皇后が李宸妃の生んだ仁宗を自分の子とし、楊淑妃にかいがいしく面倒を見させたこととともに、次のようにい

太后（劉皇后）、帝を保護するに既に力を盡くし、而して仁宗の太后を奉る所以も亦た甚だ備はる。上（仁宗）、春秋長ずるに、猶ほ宸妃の出むところ爲るを知らずして、終に太后の世、毫髪も間隙無きなり。

この記載に、劉皇后がひとかたならぬ愛情をそそぎ、仁宗も劉皇后を慕い、両者は血のつながった母子同然の圓滿な關係にあったことが明白になる。このことは、呂夷簡が劉皇后

に李宸妃の喪禮について奏上したときのことばにもうかがえる。李宸妃傳に、その喪禮をめぐる經緯を記している。

初め、章獻太后（劉皇后）、宮人の禮を以て外に治喪せんと欲す。丞相呂夷簡、禮宜しく厚きに従ふべきを奏す。太后、遽かに帝（仁宗）を引き起つ。頃く有りて、獨り簾下に坐し、夷簡を召して問ひて曰く、一宮人の死するに、相公の云云するは何ぞやと。夷簡曰く、臣、罪を宰相に待ち、事に内外無く、當預ならざる無しと。太后、怒りて曰く、相公、吾が母子を離間せんと欲するやと。夷簡、從容として對へて曰く、陛下、劉氏を以て爲念せずんば、臣、敢へて言はず。劉氏を尙念すれば、則ち喪禮宜しく厚きに従ふべしと。太后、悟り、遽かに曰く、宮人は李宸妃なり、且つ奈何んぞと。夷簡、乃ち治喪するに一品の禮を用ひ、洪福院に殯せんことを請ふ。

（略）

ここには、劉皇后が仁宗に李宸妃のことをひた隠しにしてきた事實もうかがえよう。

これに對して、生みの親であった李宸妃は、生前どのような身を處していたのか。李宸妃傳には、その人となりを「莊重寡言」の四字を以て評するとともに、次のようにいう。

初め仁宗の襁褓に在りしとき、章獻（劉皇后）以て己れの子と爲し、楊淑妃をして之を保視せしむ。仁宗即位するに、妃、嘿して先朝の嬪御の中に處り、未だ嘗て自ら異とせず。人、太后を畏れ、亦た敢へて言ふ者無し。太后の世を終はるに、仁宗自ら妃の出むところ爲るを知らざるなり。

その寡黙な性格も手傳つてか、李宸妃が終世、實の子に對する思いに耐えていたらしい悲しい事實もうかがえよう。

このように、劉皇后の實母さながらの養母の像、そして李宸妃の生母ながらの他人を裝う像が史の記載から顯現してくる。すでに指摘した「抱粧盒」に見る劉皇后と「仁宗認母傳」に見る李宸妃の像とは、この明暗好對照な兩者の實像をそれぞれにデフォルメしてきたものでなからうか。それによると、現存する「抱粧盒」と「仁宗認母傳」から知り得る二つの情節の分化は、ひとまず根源的に、劉皇后と李宸妃に對する捉え方の相異に起因するものであったと思われる。

しかし、そこには史的事實に異なる設定の人物が登場する。すなわち、「抱粧盒」の寇承御と陳琳、そして南清宮八大王、「仁宗認母傳」の包丞相や郭槐などがそれである。その中で、仁宗の養育者となる南清宮八大王、あるいは李宸妃

の訴えをうけて眞相を究明する包丞相は、どのようなところから設定された作中人物であつたらうか。劉皇后と李宸妃という史的人物にあわせて、その作中人物を探ることは、二つの情節の形成についても明らかにしてくれるところがあるかも知れない。

五

「抱粧盒」において、南清宮八大王は劉皇后の人的對極に置かれているが、ここで注意したいのは、劉皇后の史的事實に確認し得る養育者の面が、南清宮八大王に移っている點である。すでに指摘したように、『宋史』によると、燕王（元儼）は仁宗に生みの母のことを知らせた人物であるものの、「抱粧盒」において、陳琳から皇子仁宗を託される楚王、すなわち南清宮八大王は、この燕王元儼を指しているのではなからうか。

「抱粧盒」では、第二折と第三折の間にはさまれた楔子の冒頭、外の扮した楚王が登場すると、次のように名乗る。

某、乃ち楚王趙德芳、當今と嫡親の兄弟なり。世人の南清宮八大王と稱し爲す者、是れなり。

趙德芳とは、太祖の第四子で太平興國六年（九八一）に二十

三歳で早世し、のちに楚王を贈られた皇親の名にはかならない。しかし、宋の王闢之の『澠水燕談錄』巻九「雜錄」のなかに、

慶曆中、皇叔燕王元儼、薨ず。仁宗、追悼すること尤も深く、有司に詔して位號の尤も尊美なる者を選び以て之を追榮す。乃ち特に天策上將軍を贈るは、常典に非ざるなり。王、性嚴毅にして、威望、天下に著はる。士民の識ると識らざると、之を呼びて「八大王」と曰ふ。犬戎尤も之を憚る。

また同じく宋の沈叔の『諸史』⁽¹⁵⁾に、

周王元儼、太宗皇帝の第八子なり。(略)慶曆四年(一〇四四)燕王に封ぜられし時、富鄭公、河北守禦十二策を條上す。其の首策に曰く、北虜の風俗、親を貴ぶ。率近親を以て名王・將相と爲す。所以に中國の人を用ふるを視るも亦た其の國の如くす。燕王の威望、北虜に著はる、燕・薊の小兒の夜啼くに遇ふ毎に、其の家、必ず之に驚かして曰く、八大王來るなりと。(略)

といい、かつ燕王元儼は太宗の第八子であることから、南宮八大王が暗にこの元儼を指していることは否めないであろう。そこで問題となるのは元儼という實在した人物について

四帝仁宗認母故事考(堀)

である。

『宋史』巻二四五の周恭肅王元儼傳によると、元儼は廣額豐頤の顔立ちで、その嚴毅は人を壓し、若くして奇穎のため太宗に寵愛されたが、のち仁宗が幼年で即位し劉皇后が垂簾の政を施くと、劉皇后に嫌われるのを恐れて引き籠り、狂を装い參内しなかつたという。しかし、劉皇后の死後、仁宗親政の時代には、重用されて景祐二年(一〇三五)には荆南・淮南節度使を授けられるにいたり、最晩年、病床にあった時には、仁宗みずから親しく見舞ったという。

慶曆三年(一〇四三)冬、大いに雨雪ふり、木は冰り、陳・楚の地尤も甚だし。占者曰く、憂ひは大臣に在りと。既にして元儼の病甚だし。上(仁宗)の憂ひ色に形れ、親しく臥内に至り、手もて調藥し、人を屏けて與に語ること之を久しくし、對ふる所忠言多し。白金五千兩を賜ふに固辭して受けず。曰く、臣、羸瘵し且つ死すれば、將に家國に重費せしめんとすと。帝、爲に嗟泣す。

元儼の病勢を案じてみずから調藥する仁宗の姿には、並々ならぬ無量の思いが看取されよう。元儼は、仁宗にその出生の秘密を明かした人物のみならず、劉皇后没後の親政時代にあっては、存命する唯一の皇親として特に尊禮されたのであ

つた。⁽¹⁶⁾ こうした背景を視野に入れてみると、南清宮八大王を仁宗の養育者として設定するのは、元儼が劉皇后の在世中に不遇をかこち、またのちに仁宗と深い絆で結ばれていたということを反映していたのでなからうか。また、王銍の『默記』卷上の張茂實に關する記事には、

章聖（眞宗）、劉后を畏れ懼る。凡て後宮に皇子・公主を生むに、俱に留めず。

といい、張茂實も眞宗の子でありながら内侍の張景宗に撫養されたという。ここには、皇子仁宗が劉皇后の魔手をのがれて南清宮八大王のもとで育てられたという設定に、相通するものが見られよう。おそらく、こうした所傳も「抱粧盒」の情節の形成に關わって、事實上の養育者劉皇后を、むしろ殘忍無比な人物として形象する一方、元儼にその養育者の像を付託していたものと推測される。こうして劉皇后と南清宮八大王を人的對極に置くとともに、兩者の間を動く人物として寇承御と陳琳を配し、劉皇后の不善に對する忠節不屈の宮廷世話ものとして、その母子相會團圓する情節を形成してきたのでなからうか。しかし、その間、史的人物である劉皇后と燕王元儼のベルソナをもつ南清宮八大王とを人的對極に置いていたことは、ある意味では、その情節がより深く史的事

實に根差していたことを暗示しているのかも知れない。

六

「仁宗認母傳」における包丞相は、零落した李宸妃の哀しい訴えをうけて、その真相の究明にあたる人物である。その間、仁宗に生みの母のことを知らせたという點に着眼すると、包丞相は、史的事實にいう元儼に比すべき人物といえよう。しかし、元儼が一擧に包丞相に置き換えられたと考えるのは性急にすぎよう。

ここに登場する包丞相とは、仁宗朝に實在した包拯のことである。包拯は、在世中から公正無私の清官と知られ、つとに「關節不到、有閻羅包老（關節到らず、閻羅の包老有り）」と稱贊されたという。⁽¹⁸⁾ 仁宗崩御の前年の嘉祐七年（一〇六二）に没するが、後世、小説戯曲の世界で、いわゆる公案もの（裁判もの）の名判官となり、包公ものと稱される一群の作品が生まれている。しかし、『龍圖公案』に收載される「割牛舌」⁽¹⁹⁾などを除くと、その大半が他の事件を包拯に附會したもののようである。このことを踏まえてみると、「仁宗認母傳」に見る情節の形成にあっても、包拯がその事件に附會されたと見られる。けれども、包拯は仁宗朝の清官として、時

の皇帝仁宗をめぐる事件に附會されやすい要件を備えていたといわねばならないであろう。しかも、王銍の『默記』巻下には、

皇祐二年（一〇五〇）、狂人冷青有り、言ふ、母王氏は本宮人にして、禁中の火に因りて外に出づ。已に嘗て幸を得て娠有り。冷緒に嫁して後に青を生み、薬舗の役人と爲ると。高繼安なる者と之を謀り、府に詣り自ら陳べ、并せて妄りに神宗の其の母に與へし繡抱肚を以て驗と爲す。（略）

というわが國江戸時代の天一坊事件に比すべき事件を記し、包拯が趙槩とともに處斷を下したという。その事實はともかく、冷青の母の王氏には、確かに零落した李宸妃に通う面もあり、事件に包拯が關與していることは、注目に値いしう。こうした所傳も情節形成の根底に關わつたであろうし、包拯が仁宗の母子相會に附會されると、公案ものの情節も形成されたであろう。

この種の公案ものでは、事件の解決につながる手掛かりや證據が不可缺にならう。「仁宗認母傳」では、包丞相の後頭部のこぶによって贗物でないことを見究めた李宸妃が、身上を打ち開けて仁宗の母たる證據を求められると、仁宗の左

手に「山河」、右手に「社稷」の四文字のあつたことを擧げている。この四文字は、仁宗が眞命天子であることのあかしでもあるが、『宋史』の眞宗本紀には、次のような記事が見えている。

母は元德皇后李氏と曰ふ。初め乾德五年（九六七）、五星、鎮星従り奎に聚まる。明年正月、后、裾を以て日を承くるを夢み、娠有り。十二月二日、開封府の第に生むに、赤光室を照らす。左足に文有り、「天」字を成す。

仁宗の「山河」「社稷」のことは、そもそも眞宗の「天」字に負うものであつたらうか。包丞相は、仁宗の兩手にその四文字のあることを確かめたのち、いよいよ眞相の究明に奔走するのであつた。またそのなかで何よりも見逃せないのは、劉皇后と謀つた郭槐を冥界裁判によって白狀させる情節である。この冥界裁判は、すでに示した「閻羅包老」を具現した裁判形態でなかつたらうか。

こうして仁宗の悲劇は團圓に轉じ、李宸妃の悲哀變奏する包公ものの誕生を見られると思われるが、この情節が明の説唱詞話本「仁宗認母傳」にはじめて生まれたとは言いがたいようである。宋のころに行なわれた説話（講釋）において、その話頭が存在したかも知れず、すでに指摘した冷青の事件など

は、その話頭の胚胎を豫想させるからである。そしてまた、元末民初に雜劇「仁宗認母」が存在したことも、看過しがたいからである。

ここで少しく雜劇「仁宗認母」について検討しておく、元明の雜劇作品には、包公ものの數が比較的が多いようである。⁽²⁰⁾現存する作品についてのみいうと、『元曲選』(百種曲)の十種、『元刊古今雜劇三十種』の一種が包公ものである。『錄』は『錄鬼簿』、『續』は『錄鬼簿續編』、『太』は『太和正音譜』に著録されることを示す。⁽²¹⁾

『元曲選』所收の包公もの

包待制三勘蝴蝶夢(關漢卿)『錄』胡蝶夢『太』蝴蝶夢
包待制智斬魯齋郎(關漢卿)

包龍圖智勘後庭花(鄭庭玉)『錄』后庭花『太』智勘後庭花

包待制智勘灰蘭記(李行道)『錄』灰欄記『太』灰蘭記

王月英元夜留鞋記(曾瑞卿)『太』留鞋記

包待制智賺生金閣(武漢臣)『續』生金閣

包待制陳州糶米(無名氏)

包龍圖智賺合同文字(無名氏)

神奴兒大鬧開封府(無名氏)『太』大鬧開封府

玳瑁瑞盆兒鬼(無名氏)『續』盆兒鬼『太』盆兒鬼
『古今雜劇』所收の包公もの

鯁直張千替殺妻(無名氏)

この當時の包公ものの流行を視野にいれてみると、雜劇「仁宗認母」もその一翼をになう包公もの作品のひとつであったと思われる。このことを踏まえて、試みに「仁宗認母傳」の情節と雜劇中のほかの包公ものとを對比してみると、『元曲選』所收の「包龍圖智勘後庭花」「包待制智賺生金閣」「神奴兒大鬧開封府」「玳瑁瑞盆兒鬼」の四種には、鬼(亡靈)の出現によって包公が裁判に導かれる設定が見えるものの、「仁宗認母傳」のような冥界裁判型のものは見當らない。おそらく、この冥界裁判は「閻羅包老」にふさわしい裁判形式で、包公もの中でも特異な趣向であったと推測される。また「仁宗認母傳」では、包丞相が李宸妃の訴えをうけるのを陳州糶米の歸路のことと設定して、同じく説唱詞話本の包公もの一種「新刊全相説唱包龍圖陳州糶米記」に後續する形をとっている。この説唱詞話本における設定に着眼してみると、雜劇作品のなかに「包待制陳州糶米」(『元曲選』所收)が存在することから、雜劇「仁宗認母」の場合も、説唱詞話本

に同じく、この「包待制陳州糶米」に接續する作品となつていたという推測も生まれる。雜劇「包待制陳州糶米」ならびに説唱詞話本「新刊全相説唱包龍圖陳州糶米記」には、包公が探查するうち縛られて樹木に吊されてしまふ一節があり、「仁宗認母傳」にもそれと同様の情節が見えるところである。そうした類似する情節の點からも、「仁宗認母」と「包待制陳州糶米」との雜劇間の關連性が想起されよう。

このように、説唱詞話本「仁宗認母傳」から雜劇「仁宗認母」をめぐる問題も派生してくるのである。その點からも、元末明初の時期にこの雜劇が「抱粧盒」とともに存在したことは、仁宗の母子相會を題材とする小説戯曲を考察する上で、特に見逃すことのできない事象であると考えられる。

七

「抱粧盒」と「仁宗認母傳」をめぐる、その源流となる史的事實を踏まえて照射してみたが、養母と實母の死後に生みの母のを知った仁宗の悲劇は、その事實とは裏腹の母子相會する團圓の情節に變容し、「抱粧盒」に見る劉皇后の不善に對する忠節不屈の世話ものと、「仁宗認母傳」に見る李宸妃の悲哀變泰する包公ものとに分岐してきたことが明白

四帝仁宗認母故事考（堀）

にならう。しかも、新出資料である明の成化年間所刊の説唱詞話本「仁宗認母傳」によつて、不明であつた雜劇「仁宗認母」の情節も推定でき、「仁宗認母」については、元明の雜劇中の包公ものとの關連が想起されたのである。これによると、仁宗が母李宸妃と相會團圓する「抱粧盒」と「仁宗認母傳」の二つの情節は、少なくとも元明の雜劇には發現して、ここに「抱粧盒」・「金丸記」と、「仁宗認母」・「仁宗認母傳」・「桑林鎮」とに見る二つの系譜が生まれたと推測される。

また「抱粧盒」に見る劉皇后と「仁宗認母傳」に見る李宸妃の姿像からは、漢の高祖の呂皇后と人彘に化した戚夫人を連想しよう。その二つの情節は、寇承御をついに死にいらせた殘忍無慈悲な劉皇后と、弱くも悲哀に耐えぬいた李宸妃の故に、受容されて流行したのであろうか。それは、いづれも仁宗の母子相會を題材とするだけに、折中改變されて合體する因子をはらんでいたとも思われる。後世の『龍圖耳錄』あるいは『三俠五義』の章回には、この劉皇后と李宸妃がともに姿を現し、新たな様相を呈するにいたるのである。

〔注〕

(一) 「四帝仁宗出生故事考——赤脚大仙轉生の話——」(中國

詩文研究會『中國詩文論叢』第一集所收、一九八二年六月刊。

(2) 『元曲選』は、中華書局重印本（一九七九年六月刊）による。

(3) 「粧盒」については、嚴敦易『元劇斟疑』（一九六〇年五月、中華書局刊）の「抱粧盒」の考説に、「粧盒指の是奩具性質、後來所稱の粧盒、一直到現在、是用以盛物的、多在舊式婚禮時應用、嬰兒也正可容納在內、就拿來作爲陳琳盛藏太子的用途了。」と指摘されている。

(4) 『太和正音譜』の原刊本は散佚したが、その影鈔本の朱權の自序に「洪武戊寅」（洪武三十一年）とあるのに基づく。ちなみに、撰録者の朱權は明の太祖の第十六子である。

(5) 明の呂天成の『曲品』巻下には、「金丸」（能品八）を著録し、「精忠」（能品九）「雙忠」（能品十）とともに武康の姚靜山の作とする。また「金丸」については、「元有抱妝盒劇。此詞出在成化年、曾感動宮闈。內有佳處、可觀。」とも指摘され、このことは、のちの明の祁彪佳の『遠山堂曲品』にも受け継がれている。

(6) 『明成化說唱詞話叢刊』の名のもとに影印出版されている。その中には、次のような包公ものを含む。

「新刊全相說唱包待制出身傳」

「新刊全相說唱包龍圖陳州糶米記」

「新編說唱包龍圖公案斷歪烏盆傳」

「新刊說唱包龍圖斷曹國舅公案傳」

「新刊全相說唱張文貴傳」上下巻

「新編說唱包龍圖斷白虎精傳」

「全相說唱師官受妻劉都賽上元十五夜看燈傳上巻」「全相說唱包龍圖斷趙皇親孫文儀傳下巻」

もとより「仁宗認母傳」も、これらの包公もの一種である。なお、この新出資料については、趙景深〈談明成化本說唱詞話〉（『文物』一九七二年第十一期、一九七二年十一月刊）、譚正璧・譚尋〈明成化刊本說唱詞話述考（正・續完）〉（『文獻』一九八〇年第三・四輯、一九八〇年十月・一九八一年二月刊）に紹介と考説がある。

(7) 嚴敦易『元劇斟疑』における「抱粧盒」の考説、胡適〈三俠五義序〉における「狸猫換太子」故事の考説などを指す。また『七俠五義』第一回には、俞樾の「狸猫換太子」をめぐる考説がある。

(8) ただし、「桑林鎮」の結末では、劉皇后に縊死をたまわったとし、李宸妃の請赦のことは見えない。

(9) 『錄鬼簿續編』は、『錄鬼簿（外四種）』（一九七八年四月、上海古籍出版社刊）所収本による。なお、汪元亨は、汪元亨に作るテキストもある。また『雍熙樂府』巻十七・十八には、「汪元亨」の作として雜曲を収載する。

(10) 嚴敦易『元劇對疑』の「抱粧盒」には、「仁宗認母」と「抱粧盒」に關して次のような問題提起がなされている。「天一閣鈔本『錄鬼簿續編』、記汪元亨作有「仁宗認母」一本、依題意着重「認母」一節、似或與今本抱粧盒有殊。可惜我們無從知道他的情節梗概、內中有没有陳琳・寇承御、甚至包待制穿插其間。如果抱粧盒實非明人所作、他會不會竟是「仁宗認母」的異名？或者弘治間改編陳琳抱粧盒的人、多少以這本「仁宗認母」爲參攷的藍本？這又另是一個問題了。他和後來的狸猫換太子及包公斷后的傳説、更有無血緣的關係？這些都值得注意的。」嚴氏病沒（一九六二年）後の一九六七年に「仁宗認母傳」が発見されるにいたるが、この説唱詞話本によつて、その疑問は些かながら解明されるものと考へる。

(11) 以下『宋史』からの引用は、一九七七年七月、中華書局刊本による。

(12) 早に宋の邵伯温の『邵氏聞見錄』卷八に、その記事が見える。

(13) 宋の王銍の『默記』卷上には、章惠太后（楊淑妃）が生みの母の事實を知らせたとする所傳が見える。「章懿李太后生昭陵（仁宗）、而終章獻（劉皇后）之世、不知章懿爲母也。章懿卒、先殯奉先寺。昭陵以章獻之崩、號泣過度。章惠太后勸帝曰：『此非帝母、帝自有母宸妃李氏。已卒、在奉先寺殯之。』仁宗即以輿車亟走奉先寺。（略）なお、以下『默記』か

四帝仁宗認母故事考（堀）

らの引用は、「唐宋史料筆記叢刊」本（一九八一年九月、中華書局刊『默記 燕翼詒謀録』）による。

(14) 『唐宋史料筆記叢刊』本（一九八一年三月、中華書局刊『渾水燕談錄 歸田錄』）による。

(15) 『古今説海』本による。

(16) 宋の歐陽修の『歸田錄』卷二に、「燕王元儼、太宗幼子也。太宗子八人、眞宗朝六人已亡歿。至仁宗即位、獨燕王在、以皇叔之親、特見尊禮。契丹亦畏其名。其疾亟時、仁宗幸其宮、親爲調藥、平生未嘗語朝政、遺言一二事、皆切於理。（略）」という。天聖五年（一〇二七）に太宗の長子元佐が没してのち、存命する皇親は元儼のみであった（『宋史』仁宗本紀および卷二四五參照）。

(17) 早に青木正兒『元人雜劇序説』（『青木正兒全集』第四卷所收）第六章第五節「元の無名氏傑作」に、「……第四折、仁宗が昔日の事を聽く場はだれ氣味で退屈であるが、他はいづれも好關目で、第二第三折の如きは結構極めて佳い。曲辭は本色であるが、稍や文采を施して氣持よく出來て居る。其の事は史實では無い、或は『趙氏孤兒』の藥籠に孤兒を納れて救出す趣向を學んだのでは無からうか。」という指摘がある。

(18) 『宋史』卷三一六の包拯傳に、「復官、徙江寧府、召權知開封府、遷右司郎中。拯立朝剛毅、貴戚宦官爲之斂手、聞者皆憚之。人以包拯笑比黃河清、童稚婦女、亦知其名、呼曰

『包待制』。京師爲之語曰「關節不到、有閻羅包老。」とある。ただし、「關節不到、有閻羅包老」は、すでに宋の司馬光の『涑水記聞』卷十の包拯に關する記事に見えている。

(19) 『宋史』卷三一六の包拯傳に、「……久之、赴調、知天長縣。有盜割人牛舌者、主來訴。拯曰『第歸、殺而鬻之。』尋復有來告私殺牛者、拯曰『何爲割牛舌而又告之。』盜驚服。」とある。「割牛舌」はこの事件に基づく作である。

(20) 包公ものについては、趙景深『包公傳説』、『小説閒話』所收、一九三七年一月、北新書局刊、岩城秀夫『元の裁判劇における包拯の特異性』、『中國戯曲演劇研究』所收、一九七三年二月、創文社刊に詳しい。

(21) いずれも『録鬼簿(外四種)』所收本による。

(22) 『録鬼簿』では作者名を「李行甫」に作る。

(23) 『太和正音譜』では「古今無名氏雜劇一百一十本」に著録する。また曾瑞卿の作としては、「才子佳人悞元宵」を著録する。

(24) 『録鬼簿續編』では「諸公傳奇失載名氏並附於此」に著録する。

(25) 田中謙二『元雜劇の題材』(『東方學報』(京都)第十三册第一分所收、一九四三年九月刊)「(一)先行の演藝」の「(1)講釋」には、雜劇の公案ものに關して、「なほ小説家の講釋に屬するものとして、裁判事件を取り扱った一類がある。(略)

元劇作家も競うてこれを劇化したらしく、この種の雜劇がかなり存する。元劇では主として包拯なる判官に歸せられている。」という指摘がある。